

# 生薬ニュース

近畿大学病院東洋医学研究所附属診療所調剤室

## ブクリョウとは・・・

マツホド： *Wolfiporia cocos*（サルノコシカケ科）の外層を除いた菌核のことで、日本、朝鮮半島、中国に分布しており、枯れたマツの根に発生する、いわゆる『キノコ』のなかまですが、地中で大きな菌の固まりをつくるだけで、地上には出てきません。

【性味】 甘・淡、平

【薬能】 利水滲湿、建碑、安神

## ブクリョウの成分と薬理作用・・・

ブクリョウの主な含有成分は、多糖類であるパチマン、トリテルペン酸類のエブリコ酸、パチマ酸、シイタケの成分でも有名な、エルゴステロールなどが知られています。

薬理作用は、利尿作用、胃潰瘍発生予防、また、腎炎のラットでは尿たんぱくの排泄抑制なども報告されています。

古くから“痰滲利水”の代表生薬とされ、消化管内や組織間の余分な水分を血中に引き込み尿量を増やし、むくみなどの改善が期待できます。

## ブクリョウの採取・・・

上述しました通り、ブクリョウはマツの根に生育するキノコですが、江戸時代には伐採した後のマツの精気が下降して根に長い間にわたって溜まり大きな塊となったものと考えられてきました。

このブクリョウには、独特の採取方法があります。『ホド突き』と呼ばれる手法で、先端の鋭利な棒でマツの切り株の皮部と木部の間にこの棒を突き刺します。『バタ』といわれる菌糸の生育状況によってそのキノコの発生及びその年数を判断します。切り株の2-3m周辺から棒を突き刺して、徐々にその範囲を狭めてブクリョウを探し当てます。ブクリョウに突き当たると、お餅に箸を刺したような感触が残り、棒の先端に白いブクリョウ片が付着し、さらに特異臭がすることからも判別できるようです。

かなり原始的な方法に聞こえますが、これは野生品を採取する方法で、栽培品（マツの木片を土に飢えてマツホドを栽培する方法）の際には使用しないと思います。



## こんなものが・・・

当診療所調剤室の奥のほうにこんなものがありました。これは、**ブクリョウ**の生成されていない『原木』とも言いますか、どちらも直径が20cm強とかなり大きく、貴重な標本です。これは平成2年に当診療所にやってきた野生の**ブクリョウ**で、30年以上もカビも生えずに保管されていたことになりますね。ちょっと白くなっている箇所はホド付きの際についた傷でしょうか？  
デシケーターの下層のシリカゲルがピンクに変色しています。乾燥剤の効果が期待できない状態なのですが、しっかり密封していることで、保管できていたのでしょう。大きくて立派な標本が隠れていました。



## ブクリョウを含む方剤・・・

### かみきひとつ 加味帰脾湯

(心身が疲れ体力が低下し血色が悪く時に熱感を伴う人の、貧血、不眠症、精神不安、神経症)

### これいさん 五苓散

(水様性下痢、急性胃腸炎、頭痛、むくみ)

### にんじんようえいとう 人參養榮湯

(病後の体力低下、疲労倦怠、食欲不振、寝汗、手足の冷え、貧血)

### りっくんしとう 六君子湯

(胃腸のよわいもので疲れやすいものの胃炎、消化不良、食欲不振、嘔吐など)

## ブクリョウと対薬・・・

生薬には『対薬(たいやく)』と呼ばれる考え方があります。2剤ずつセットで方剤を見ると、その構成、バランスをうまく理解することができます。**ブクリョウ**は対薬として有名な生薬の中の一つです。

少し専門的な話ですが、左のリストにもあります、六君子湯を取り上げたいと思います。この方剤の構成生薬は、人參、白朮、**ブクリョウ**(茯苓)、陳皮、半夏、生姜、大棗、甘草で、消化器症状の改善に処方される漢方です。この方剤では人參が主薬(方剤の主軸とみなされる生薬)と考えられており、これに補佐的な作用を期待して、他の7剤も含まれます。例えば、白朮と**ブクリョウ**は共に健脾燥湿の作用を持つのですが、どちらかといえば**ブクリョウ**は利尿作用が強く、白朮は補気作用が強いため、互いに補ってバランスをとっているといえます。陳皮・半夏、生姜・大棗もそれぞれ対薬とかがえられており、陳皮と半夏は互いの作用を強めると考えられています。一方で、後者は、生姜は大棗の胃もたれを防ぎ、大棗は生姜の刺激性を緩和する、それぞれの副作用を弱めあうタイプの対薬として知られています。

単剤としての作用と対薬になったときの作用、どちらも知ることでもその方剤への理解がより深まるような気がしますね。

